

月刊絵本「こどものせかい」の研究 その 1

杉田豊に見る「こどものせかい」の特徴

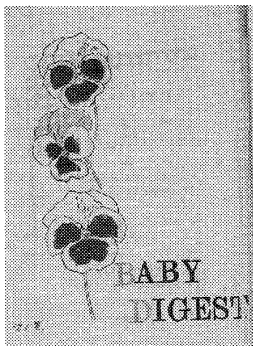
柴村 紀代

藤女子大学 人間生活学部 保育学科

1. はじめに

現在、カトリック系幼稚園を中心に購読されている月刊絵本「こどものせかい」の歴史は古く、1948 年 5 月、光の友社事業団¹⁾により創刊された「BABY DIGEST」から引き継がれたもので 2001 年 5 月で 53 巻 12 号となり、創刊から 54 年目を迎えている。同種の月刊絵本「こどものとも」(1956 年 4 月創刊 福音館書店)が広く普及し、まとまった研究書²⁾が出される中で、「こどものせかい」の解明はほとんどなされないまま今日に至っている。その原因としては、公立図書館での購読がなく、国立国会図書館³⁾、大阪国際児童文学館⁴⁾等の所蔵も少ないなど研究者の目に止まりづらい点があげられる。幸い、藤女子大学はカトリック系大学として「こどものせかい」のバックナンバーをある程度保有している⁵⁾。欠本の号は、著者が何度か現発行所である至光社を尋ね、現在目録作りに努力中である。今号から何回かにわけて「こどものせかい」の全容と主要絵本作家の「こどものせかい」における特徴を解明していきたい。

2. 「BABY DIGEST」から「こどものせかい」への経緯



「BABY DIGEST」創刊号

「BABY DIGEST」は 1948 年 5 月 25 日に創刊号が出された。発行所は光の友社事業団で、小学生を対象に広く外国のことを知り、世界の子供たちと仲良く手を取りあって行けるよう、創刊号は「イタリア・フランス」、次号からは「スイス・ドイツ・オランダ」

「イギリス・スペイン・ポルトガル」等各国の特長やその国の名作、昔話などを紹介している。B6 判 65 頁の薄い小冊子は、表紙も三つのパンジーが表紙左側に簡素に並ぶ地味なものであった。誌名は 1 巻 4 号 (1948 年 9 月号) から「ベビーダイジェスト」とカタカナ表記になる。発行所は創刊号から 1 巻 6 号 (1948 年 11 月号) まで光の友社事業団、1 巻 7 号 (1948 年 12 月 25 日号) から現在まで至光社が発行している。

有限会社至光社は 1950 年 5 月 10 日、代表取締役武市君子、専務武市八十雄⁶⁾、取締役柳瀬元男、柳瀬富男、監査役武市万寿美をもって設立された。

創刊の経緯については、直接武市八十雄氏からお話しをお聞きすることができた。当時、慶応義塾大学の学生だった武市八十雄は、同じく慶応の学生だった堀田幸雄、石井虎三郎、高橋かつ子らと何か子どものための雑誌を出そうとフランススコ会のカナダ人神父 M・ガブリエルに相談し、特名法人光の友社事業団を設立する。「ベビーダイジェスト」の誌名は、子供たちが、さまざまな知識を Digest (吸収する) できるように、という意図からつけたという。会長に田中耕太郎 (後に耕太郎夫人の田中峰子が雑誌編集に尽力する)、理事に武市八十雄、湯浅年子、堀田幸雄、顧問に松本蒸治、柳瀬元男、M・ガブリエルが名をつらねたが、実質的運営は、学生たちが担当した。編集責任者に堀田幸雄があたり、武市八十雄は読者欄などもっぱら雑用係を引き受けたという。しかし、学生の手による発行は 1 巻 5 号までで (1 巻 6 号欠号につき不明)、1948 年秋、堀田幸雄らが翌年の卒業にあたり、一時は「ベビーダイジェスト」廃刊の話も出た。しかし、M・ガブリエル神父の助言もあり、誰かが残って続けるべきだということになった。そこで、雑務係をしていた武市八十雄が一番読者とのつながりが深いということで彼が残ることとなり、発行所を正式に「至光

1) KIYO SHIBAMURA: "Research on a month picture magazine 「KODOMO NO SEKSAI」" part1

社」として続刊されることとなった。編集責任者は堀田幸雄のあとを M・ガブリエルが引き継ぎ「こどもの世界」と誌名が変わった後の 5 巻 12 号までを勤め、その後を田中峰子が引き継いだ。

武市八十雄らが、児童雑誌を発行した背景には、当時の児童文化の復興もあったと推測する。戦後、子ども向けの良心的雑誌が相継いで出版された。1946 年 4 月には「赤とんぼ」(実業之日本社)「子供の広場」(新世界社)「コドモノハタ」(新世界社)が創刊され、敗戦後の混乱の中で、大人たちは次代を荷う子ども達に寄せる熱い思いをこれらの雑誌に託した。1945 年から 1949 年までに発行された児童雑誌はプランゲ文庫⁶⁾所蔵に見るだけでも 380 タイトルにおよぶ。これらの雑誌からは、戦後の児童文学を代表する「ビルマの豎琴」(竹山道雄)や「貝になった子供の話」(松谷みよ子)など、戦後の児童文学の代表作や新しい書き手の誕生に大きく貢献して行く。しかし、これらの雑誌は短命で「赤とんぼ」が 1948 年 8 月に終刊を迎える等、ほぼ 4~5 年でやがて「少年倶楽部」(大日本雄弁会講談社)「少女の友」(実業之日本社)等の大手出版社の娯楽雑誌に取って代わられていった。

「ベビーダイジェスト」の誕生は、これらの良心的児童雑誌誕生の気運の中で生まれ、地味だが、カトリック信者らの購読によって支えられ、終刊の相つぐ中で存続を維持して行ったものと思われる。

「ベビーダイジェスト」から絵本形式の「こどものせかい」までの経緯を整理すると以下ようになる。

- ① 1948 年 5 月 25 日「BABY DIGEST」創刊
- ② 1 巻 4 号(1948 年 9 月号)から「ベビーダイジェスト」に改題。
- ③ 5 巻 8 号(1953 年 1 月号)から「こどもの世界」に改題。(版型変更は 6 巻 1 号(1953 年 6 月号)から)
- ④ 7 巻 9 号(1955 年 2 月号)から「こどものせかい」に改題。(版型変更は 7 巻 10 号(1955 年 3 月号)から)
- ⑤ 15 巻 11 号(1963 年 5 月号)から 1 冊 1 話の絵本形式になる。

通観して「ベビーダイジェスト」の時代はまだ宗教色が強く、「聖書物語」の連載や聖人の話が毎号載っているが、やがて少しずつ子どもに楽しく読んでもらうよう工夫や努力がはられるようになる。「ベビーダイジェスト」の執筆人には初期には倉橋惣三、野辺地天馬、渋沢青花らの名が見え、表紙画



「こどもの世界」 6 巻 1 号



「こどものせかい」 7 巻 10 号

には脇田和、武井武雄、桑田雅一らが起用された。

続く「こどもの世界」の時代は、ちょうど良心的児童雑誌が次々と終刊して行く頃で、編集人に桑原三郎や藤田圭雄、平塚武

二らが加わり執筆人に児童文学

者や小説家などの起用が増えていく。連載童話にもバウム原作「OZ のまほうつかい」が載

るなど、児童雑誌と

しての体裁が整って行く時期にあたる。しかし、その後、1953・54 年の経営状態は苦しく、毎号「ライオンはみがき」や「服部時計店」「明治生命」等の広告でしのぐ時期が続いた。

1955 年 2 月から「こどものせかい」と改題し、「カトリック保育教材雑誌」として新たなスタートを切ったのは、それらの事情が反映していたことをうかがわせる。

児童雑誌としての「ベビーダイジェスト」「こどもの世界」の性格やその執筆人については、当時の他の児童雑誌との比較研究など興味深い問題を含んでいるが、それらについては、いずれ又別の機会にゆずることとし、月刊絵本としての体裁を整え始めた「こどものせかい」について次に述べて行きたい。

3. 「こどものせかい」の変容

7 巻 9 号(1955 年 2 月号)から「こどものせかい」に改題されたときの頁数はわずかに 16 頁。版型は 7 巻 10 号から A4 サイズ横長と、以前の「こどもの世界」の正方形に近い型から絵本形式に近い型に変化した。表紙画は 5 巻 1 号から続いた桑田道夫から堀文子の柔らかい子どもの姿の絵に変わっている。編

集長は6巻1号からそれまでのM・ガブリエルから田中峯子に変わっているが、両者は「ベビーダイジェスト」の時代から編集員として、互いに不況の時期を乗り切ってきたメンバーである。

「こどものせかい」に変化が起きるのは、9巻11号（1957年4月号）から製作者として武市八十雄の名前が登場する頃からである。

武市八十雄は、堀田幸雄らが抜けた後も引き続き実質的な雑誌制作者として関わっていた。しかし1951年から2年間、結核で入院した時期は、武市八十雄の母武市君子が発行者の責務を果たしている。1957年から改めて製作者として奥付に登場するようになったのは、この頃ようやく病が癒え、医者から社会復帰の許可が正式に出たことにもよる。この頃の心境を武市八十雄は、松本猛との対談の中で次のように語っている。

「実を言うと昭和32年頃までは、借金さえなかったらいつでもやめたかったんです。それが「こどものせかい」が、形だけの一つの絵本らしいものになってきた頃に、堀文子さんの所で福音館書店の松居さんと出会ったんです。それからよくしゃべるようになって、お互いに真似だけはやめよう、ふたてに別れようじゃないかということになった。松居さんは物語の絵本でやっていくという。その時ふっと腹が決まったのね。ぼくは感覚的なものをやろうって。」

（「私の絵本づくり 武市八十雄」『戦後絵本の歩み』いわさきちひろ絵本美術館 1986年）

昭和32年と言えば松居直⁸⁾が「こどものとも」を創刊して1年たらずの時期である。まだ「こどものとも」も軌道にのらず、悪戦苦闘をしている時期だが、その分若々しい夢と抱負に満ちた1才年上の松居直と、武市八十雄とが意気投合し雑誌作りについて熱っぽく語り合ったであろうことは容易に想像がつく。

誌面にもこの頃から若い画家の起用が多くなり出す。8巻6号（1955年11月号）で初めて画家野村昌（さかり）が登場し、以後毎号のように誌面を飾っていた。この野村昌宅で武市八十雄と出会った杉田豊は、9巻5号（1956年10月号）から「こどもの世界」に初登場、9巻11号から武市八十雄が雑誌制作者として本格的に雑誌作りに取り組み、やがて「こどものせかい」を月刊絵本雑誌に変貌させて行く時代に、杉田豊も又武市八十雄のすすめで絵本作家への道を歩み始めたのである。

4. 杉田豊と「こどものせかい」

杉田豊は1930年、埼玉県大宮市に生まれ、東京教育大学教育学部芸術学科を卒業後、7年間、学校図書に勤めるが、前述した野村昌の紹介で、「こどものせかい」の挿絵を手がけるようになる。「こどものせかい」と縁の深い画家は、柿本幸造、岩崎ちひろ、谷内こうた、葉祥明、いわむらかずお等多数いるが、絵本作りのスタートが「こどものせかい」で至光社での絵本が一番多い画家として最初に杉田豊を取りあげることとした。

杉田豊は絵本以前にはグラフィックデザイナーとして活躍していた。それが至光社の武市八十雄と出会って、共に絵本作りに情熱を傾けるようになる。「こどものせかい」における杉田豊の特徴といえば、原画を小さく描き、それを印刷する段階で大きく拡大するという独特な製作方法にある。これは武市八十雄との話し合いの中から生まれて来たものである。印刷技術を特に大事にした武市八十雄は「まず製版と印刷と用紙の技術をレベルアップしよう」と、製版を新日本セイハン（株）、印刷を大阪凸版印刷（株）と定め、技術者、担当者との熱っぽい話し合いの中からこの独特な技法を生み出した。この姿勢がその後、表紙裏に「こどものせかいスタッフ」として、製版、レタッチ、写真植字の技術者の名前まで明示する至光社の方針として定着していったのである。

この小さく描いて大きく拡大する絵本の一つに「おはよう」（「こどものせかい」第21巻3号 1968年9月号 蔵富千鶴子文）がある。



「おはよう」

「おはよう」は、お日さまが朝、顔を出して、動物たちの朝のあいさつを楽しく聞くといい単純なストーリーリイだが、見開きいっぱいに描かれた動物たちが、思い思いのポーズでお日さまに「おはよう」というさわやかな絵本である。小さく描くことで、動物以外の余分なものを捨象し、シロクマ、シカ、クジラ等が見開きいっぱいに大胆な構図で描かれる。

小さいサイズを大きく拡大して、それを完成した画面として見せることは、よほどデッサン力のしっかりした画家でなければ、どこかに甘さやバランスの悪さが出てしまうものだが、杉田豊はその難しさを逆手に取って、見るものをハッとさせるような生き生きとした画面を作りだした。

「こどものせかい」の制作過程の特徴の一つに、武市八十雄を始め、文を担当する蔵富千鶴子、画家の杉田豊ら制作者が集まっての共同討議がある。普通、絵本を作る時は、文が先にあり、それを元に編集者からのページ割りに沿って画家が絵をつけるという方法を取るが、至光社の場合は、次号に何を出すかという段階からみんなで話し合っ決めて行った。前述の「おはよう」の絵本も、ミーティングの中で、ひょいと誰かが「good morning」と言った言葉から生まれたという。そこから、人さまざまだい「おはよう」があるように、動物たちにもさまざまな「おはよう」がある。というように発展していった。ようやく描き始められた一枚一枚の絵の中から、どれをどのような順序で並べるかも、この共同討議の中から生まれて来た。

その共同作業のようすが、「おはよう」のとり込み付録「おかあさまへ」の中で目に見えるように書かれている。

「文章の蔵富さんときどきあらわれて、どのような展開になるのかと不安の口もと、武市さんの渋い目、そばにいないけれど頼りになる新日本セイハンの野村社長のひげ、こんな要素が画面の表情にあらわれながら、二倍の量の原画ができたころ、やっと全ぼうが見えてきました。できあがったときはうきうきしてみた絵も、カバのひと声？捨てなければなりません。気がついたときは、いろいろな場所から「おはよう！」「おはよう！」の声が聞こえてきました」

この至光社独特の制作方法は、画家の個性を尊重しながら、「感性の絵本」⁹⁾という武市八十雄の目指す絵本の世界を模索する有効な方法となっている。

5. 杉田豊の絵本に見る「感性の絵本」

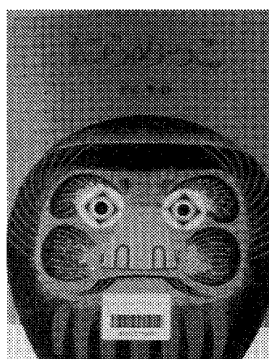
至光社の絵本は「感性の絵本」と言われてきた。武市八十雄自身も「絵本というのはいろいろあっていいと思う」が、「至光社としては感じる・感じさせる絵本をやってみたい」とかたっている。この

「感じる絵本」「感性の絵本」とは、人間の基本的な働きを、考えることと感じることに分けたとき、そのどちらも大切なことだが、子どもはまず最初に物そのもの、事そのことをそのまま感じるものであるという。子どもの純粋な感性に訴えかけるものとして、「絵本は、感じるという世界に向かうための道具としては比較的やりやすい場所にいるという気がします」⁸⁾と武市八十雄は説明している。

その他、“感ずる絵本”の条件として、「絵と文二つのもののハーモニー」「絵や文の底にどれだけのかくし味をもてるか」「絵や文で全部を説明してしまうのではなく、感じる部分を残す」等の言葉が見える。

この「感性の絵本」とは何かを、先の杉田豊の「こどものせかい」に載せた「おはよう」と『にらめっこ』(杉田豊作 講談社 1992)を例にして見てみたい。

両者とも動物をモチーフにしてそのさまざまな表情を見開きページいっぱいに展開しているところに共通点がある。



『にらめっこ』



『にらめっこ』よりサル

『にらめっこ』は、最初は展覧会用の絵として描かれたという。講談社から絵本の話が持ち込まれた時、これら 14 枚の原画にタイトル画と表紙画を書き足して『にらめっこ』という絵本が誕生した。杉田は「これらは動物の顔を正面からとらえたものを描きたいと思って描いたんです」「『心のつぶやき』みたいなイメージを出したくて」¹⁰⁾と永田萌との対談で語っている。『にらめっこ』では、4種類の金を使い、デフォルメされた形や線によって、写実的ではないのに、いかにもサルやゾウそのものを感じさせる見事な絵だ。しかし、これを絵本として見た時、読者が動物とにらめっこするというストーリーがあるにも関わらず、1枚1枚の絵の迫力に押されて、「にらめっこ」というストーリーはどこかに消

しとんでしまう。

これに対して「おはよう」では、11種の動物が大きく描かれているが、1枚1枚の絵の主張よりも、いかにもそれぞれの動物の「おはよう」の声が聞こえてくる雰囲気がある。

「感性の絵本」とは、読者に出来るだけ多く感じてもらうために、極力画や文の説明を省くという意味ではない。絵本という平板な世界から、描かれた動物たちの個性や、「おはよう」で言えば、起き出した後の動物たちの日常にまで自然と想像の世界がふくらむような豊かさを目指していると言えるのではないかな。

読者に多くを感じてもらおうという試みは、論理的に説明できるものではなく、画家や文をつける人たちと武市八十雄との一作毎の試行錯誤から生まれてくるものである。

その制作過程の産みの苦しさと、それによって生まれた見事な“感性の絵本”を次に「かずのほん」¹¹⁾を例にして見てみたい。これは後に表紙を変えて、国際版絵本『おやすみなさい1・2・3』として出された。



「かずのほん」

せて増えて行くという形が多い。しかし、この「かずのほん」は、ベッドにねている男の子が、眠れないまま数を数えるというストーリーになっている。そのために絵本全体が、男の子の淡い夢の世界のように見えてくる、フクロウが帽子をかぶっているのも、水の中のカバのしっぽに男の子がつかまっているのも、夢の世界の出来事のように見える。入眠時の浅い眠りの中では、二頭のキリンの首にかけられたブランコに男の子が乗っている。ワニのお腹に結びつけられた10個の風船でワニがフワッと浮き上がっている。それらは、かずの絵本というより、楽しい夢として読者は許容できる。

ページと共に数が増え、その数だけのモノが描か

れる、というある意味で子どもの教育的側面を持った「かずの絵本」に、これだけの豊かな広がりを持たせた絵本を私は今だかつて見たことがない。それは意図して生まれて来るものではなく、共同作業の苦しみの中から自然に産み出されたもののように思える。この絵本の制作過程が「こどものせかい」の折り込みに書かれているので、それを引用してみたい。

「〈かずのほん〉この企画はだいぶ前からありました。(中略)最初にできたストーリーで絵をかきだしましたが、そのうち何となく感じがつかめなくなり、筆の先が鈍くなってきました。何点目かになり、ふと気がつく、リズムがなくなっています。絵本のリズムです。どうも数を扱っているせいか、非常にきちんと、かたく、直立不動の姿勢のようです。過去にもあったことですが、緊張すると、なんとなく体にも心にも力がはいってしまい、その絵からあまり語りかけてこなくなります。オツにすまして、きちんとしたお利口な画面からは、話しごえが聞こえてきません。お友だちになれないのです。たいへん残念でしたがさようならいたしました。」

この後、長いパジャマを着た子が頭に浮かんで来て、一人ではさびしくて、一羽のフクロウとお話しをしてみる。という絵が生まれる。「それを見た武市さんは『何かできるよ。お話しできるよ』とつぶやきました。私もこんどはお話が聞こえてくるようです」と続いて、この絵本が完成するまでが語られている。

ここに、何が「感じる絵本」で、何が「感じる絵本」ではないかの秘密が語られているような気がする。

最初にできたストーリーは、きっと理論的に構築された絵本だったのではないだろうか。「りんごが1つ」で始まれば、次は果物というコンセプトに縛られて「なしが2つ」「さくらんぼが3つ」という風に、論理的連想の世界に組み込まれて行く。その理論をいかにはずすか、〈かずのほん〉という、いわば最も拘束された世界から、杉田豊は、男の子の夢の世界を描くことで鮮やかに抜け出すことができた。それを可能にしたのは、武市八十雄という優れた絵本制作者の存在であり、彼の目指す“感じる絵本”という、目には見えないが、確かに絵本の制作者と読者である子供たちが絵本を通して感性を共有しあえるという理想があったからではないだろうか。

杉田豊の絵本を通して、武市八十雄の目指す「感

性の絵本」とは何かを考察してきたが、そろそろ紙数がつきるので今回はこれで終わりとする。次回も又、「こどものせかい」の他の画家を通して、この問題を考えてみたい。

最後に一言つけ加えると、本来、一冊の絵本は、文・絵とも一人の画家によって作られたものであれば、その絵本は作家の個性の表現としてとらえられるものである。そこに関与した編集者や制作者の存在は顧みられないのが普通であるが、至光社の場合には、やはり制作者としての武市八十雄を抜きにしては考えられない。

最後に、武市八十雄が“感じる絵本”について語った言葉を引用して、とりあえずこの稿をおわりとしたい。

「画家なり詩人なりが、ふっと感じ、そしてそのひとが、そのときでなければ感じられないことが、作品となり絵本となってゆくのではないでしょう。そしてまたそれをみる読者が「ふっと」感じる。そのへんに絵本の貴さがありそうです。いうなれば、絵本は作為を為さないことから始まる不思議な出会いへの場所といってもよさそうです。なにごととも感じるひまのない現代のなかで、絵本は数少ない出会いの場所となってほしいものです。」

（「かんじるえほん」『えほん万華鏡』武市八十雄 岩崎書店 1986年

注

- 1) 光の友社事業団 「事業団は、カトリック精神にもとづいて海外事情や海外読物などの紹介を行い、利益をもって子供たちに奉仕する目的ではじめられた」とある。（1982年2月20日「桑原三郎の人と仕事」田宮裕三「極光（Aurora）」第2巻第1号）
- 2) 『日本における子ども絵本成立史－「こどものとも」がはたした役割－』一』三宅興子編著 ミネルヴァ書房 1991年
- 3) 国立国会図書館での「こどものせかい」の所蔵は0。ただし、〈こどものせかい〉〈至光社〉の検索では12冊が出るが、これは上製本になった本と思われる。
- 4) 大阪国際児童文学館 「こどものせかい」の所蔵は5巻11号より39巻12号まで129冊
- 5) 藤女子大学「こどものせかい」の所蔵は15巻11号より54巻4号（現在）まで、内欠本58冊、

29巻8号より欠本なし。

- 6) 武市八十雄 1927年パリで生まれる。5歳の時日本に帰国、慶応義塾大学文学部中退。後、1981年慶応義塾大学特選塾員となり卒業。1949年より至光社にて月刊絵本「こどものせかい」、国際版絵本の絵本制作者として独自の世界を開いてきた。
- 7) プランゲ文庫 戦後（1945～1949）連合軍総司令部（GHQ/SCAP）によって検閲された出版物がその後アメリカ、メリーランド大学にプランゲ文庫として所蔵されている。プランゲ文庫は日本の戦後史資料として貴重な存在であり、児童書8000タイトルが近年ようやく整備され、この資料の一部を借り受け2001年「占領下の子ども文化〈1945～1949〉展」が東京、広島、札幌で開催された。
- 8) 松居直 1926年京都市生まれ。1951年福音館書店入社。56年に月刊絵本「こどものとも」編集長となる。日本の絵本出版に尽力し、多くの絵本作家を育てる。又、『絵本とは何か』（73年、日本エディタースクール出版部）等絵本研究の道を拓く。福音館書店社長・会長を経て現在同社相談役
- 9) 〈対談〉“感じる絵本”について 武市八十雄／森久保仙太郎 「月刊絵本」1巻8号1973年12月 盛光社
- 10) 『永田萌対談集 絵本好きですか？』（永田萌 大和書房 1994年）
- 11) 「かずのほん」（「こどものせかい」23巻8号1970年12月）

参考文献

1. 武市八十雄『えほん万華鏡』岩崎書店 1986年
2. 今江祥智『絵本の新世界』大和書房 1984年
3. 「月刊絵本」2巻1号特集 童画の世界 盛光社 1974年
4. 「絵本」日本児童文学別冊 すばる書房盛光社 1974年8月
5. 早稲田大学「占領下の子ども文化〈1945～1949〉展」実施委員会編集『占領下の子ども文化〈1945～1949〉展 図録』（株）ニチマイ（有）スタッフ 2001年